

ミル経験主義とプラグマティズム序論

Hasegawa, Etsuhiro / 長谷川, 悦宏

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

33

(発行年 / Year)

2018-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014526>

ミル経験主義とプラグマティズム序論

長谷川 悦 宏

一 序

一九世紀イギリスを代表する思想家であるジョン・スチュアート・ミルは、様々な側面をもつ思想家である。彼の思索及び実践活動は多方面に及び、その各々の活動は今日においてもなお盛んに論じられている。特に『自由論』¹や『功利主義論』に代表される倫理学・社会哲学の分野における彼の自由主義や功利主義は、本邦においても注目され、多くの優れた研究がなされてきた。他方『論理学体系』及び『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』に代表されるミルの認識論や科学哲学は、戦後長きにわたって顧みられることがなかったように思われる。ミル認識論・科学哲学への関心の少なさの理由としては、論理実証主義

及び分析哲学に対してはもちろん、今日の哲学に対してもなお大きな影響を与え続けているフレーゲによる厳しいミル批判という、よく知られた事情が指摘できよう。²しかしそのような好ましくない研究状況も前世紀中葉から変化をみせ、ミル認識論・科学哲学への関心は徐々に高まってきたように思われる。特にスコラプスキが『J・S・ミル』において提示したミル認識論の自然主義的解釈（モデルはクワイン）は注目された解釈であり、以降のスタンダードな、少なくともそれを無視することが難しい代表的なミル解釈となった。後に見るように論者の解釈もまた、基本的には彼の解釈に従うものである（但し本発表で扱う範囲はスコラプスキのミル認識論・科学哲学の自然主義的解釈のごく一部、帰納法の論証に限定される。彼の解釈は、数理哲学、言語哲学など広範囲に及ぶものであるが、

それは本発表の範囲を超えるものである。ミル認識論・科学哲学は、現代哲学における主要な潮流の一つである自然主義に属するものとして解釈されることにより、今日復権を果たしたものと言えよう。

以上のようなミル認識論・科学哲学の自然主義的解釈とは異なり、やはり現代哲学における有力な潮流であるプラグマティズムとミル認識論との関係は、その評価が定まっていない、或いは否定的なもののように思われる。本邦においては近年伸正や勢力など肯定的な言及も見受けられるものの、代表的なネオプラグマティストの一人であるヒラリー・パトナムは両者の関係に関して厳しい評価を下している。パトナムによれば、代表的なプラグマティストであるデューイと一九世紀の経験主義者ミルとは、彼らの情熱と関心において共通するものがあつたのだが、「デューイの見るところ、ミルは自らが抱いていた伝統的な経験主義的信念——特にその還元主義——が災いして」、「空想的な社会科学を語る」ことになつた。⁵⁾ところでパトナムの解釈に比して注目されることが少ないように思われるが、デューイ研究者であるガウアンロックが『公開的討議と社会的知性』⁶⁾において展開した、プラグマティズムの走りとしてのミルという解釈は、ミルとプラグマティズムとの関係に関する評価に資するもののように思われる。但しガウ

アンロックもまた、パトナム同様、ミルの古典的経験主義に問題を見出しており、決して手離しでミルとデューイを結び付けているわけではない。本論は以下のように進む。先ずガウアンロックのミル解釈を概観し（但しガウアンロックのミル解釈中の認識論に関連する部分に限定する）、ミルの経験主義の何が問題なのかを見定める。次いで『論理学体系』の帰納法に基づき、主として既に言及したスコラプスキの自然主義的解釈に従う形で、古典的経験主義の枠に収まらないミルの経験主義像を提示することを試みる。その上で最後にガウアンロックの批判に答えることを介して、ミル経験主義とプラグマティズムとの関係に関して、論者の見通しを述べたい。なお本論はガウアンロックによるミル解釈に対する応答に留まるものであり、ミルとデューイの関係を直接論じるものではない。⁷⁾

二 ガウアンロックのミル解釈とその制限

ガウアンロックは、ミルの『自由論』の第二章「思想と討論の自由について」の一節を引用した後、⁸⁾そこに個人の精神に基づくことのない、人間の知識の持つ可謬性と社会性に基づく知識観の存在を認め、ミルをプラグマティズムの先人として高く評価する。

「個人の精神はきわめて不完全である。それは多くの誤りを犯す。しかし、私たちは自らの誤りを訂正することができ、欠陥を矯正するためには、個人の精神そのものの持つ資質に頼ることはできない、とミルは強く主張する。むしろ私たちが他人と共同で行っている批判の過程に頼ることによって、欠陥が矯正されるという。…。

この主張が注目されるのは、古典的経験論の認識論の中で、根本的変革となるからである。ミルの先輩たちはみな、真なる信念が偽なる信念から区別されるのは、結局その信念の主観的性質によるものと思っていた。…しかし、ミルは主観的基準を用いない。

…彼の立場では、観念の持つ主観的性質がどうであれ、その観念が適切なテストをパスして生き延びるなら、真であると判断してよいということになる。…真理とは社会的産物であるという考え方は、通常プラグマティストのチャールズ・サンダース・パースが最初に言い出したものとされている。しかし、この考え方が『自由論』の中にあることは、議論の余地がない。(EPD9-10、一六一―一七頁)

「真理とは社会的産物である」という真理観が『自由論』の中に見出されるというだけで、新しい真理観に関してミルがパースに先んじていたというガウアンロックの主張に対しては異論もあろう。ガウアンロックも上記の引用の後で直に、ミルが社会的「過程の本質についてあまり語って」いないこと、「専門的な認識論の考察に立ち入ることもない」ことを指摘している (EPD10、一七頁)。ガウアンロックの見るところ、「知識論の分野の著作である限りで、『自由論』は結論を述べているというより鮮やかな示唆を与える本」に留まるのである (EPD16、一五頁)。とはいえ可謬主義に基づき知識の社会的形成への着目を促すミルの示唆は、不十分ではあってもガウアンロックにとって基本的には評価の対象である。彼によれば、より深刻な「ミルの問題点は彼の哲学の基本的欠陥まで遡ることができ」(EPD25、四一頁)のである。批判されるべきは、ミルの認識論上の立場である古典的経験論、特に観念連合論なのである。ガウアンロックによれば連合主義心理学では、ある経験は様々な感覚からなるが、それらはすべて主観的なものであり、しかも主観的な連合過程によって組み合わせられる (EPD25-6、四二頁)。もしミルの認識論がそ

のような主観主義であるならば、『自由論』の彼「ミル、論者注」の要求」である「客観的な真理に到達することを目指す」と、それは両立しえないだろう（EPD26、四三頁）。確かに「真理とは社会的産物である」という『自由論』に見られる新機軸と、ミル経験主義の柱の一つである、近代哲学の流れをくんだ個人に基盤を置く観念連合論とを両立させることにはかなりの困難が予想される。だが他方、ミル経験主義のもう一つの柱である帰納法に見出される認識論・科学哲学は、社会的過程を尊重する、或いはそれを前提としてのみ妥当なものとして成立しうるように思われる。次にミルの帰納法を検討する。

三 ミル帰納法の自然主義的解釈

ミルの帰納法を検討する前に、いまだに広く認められる『論理学体系』におけるミルの帰納法に対する誤解を解くことで、ミルの帰納法を安易に古典的経験論の諸問題と結びつけることの危険性を示しておきたい。スカールによれば一九七〇年代までミル研究者の間ですら、ミルが行った帰納法の論証、自然の斉一性による正当化は循環に陥っているという、それ自体は大変興味深い問題ながら、ミル帰納法の解釈としては明らかな誤解が認められた。何故なら

ヒューム問題とミル帰納法を一連の繋がりのあるものとして扱うことには問題があるから。そのような解釈は「ミルがヒュームによって提示された懐疑論の諸問題を警戒し、動かされていた」という仮定に由来すると考えられるが、歴史的に見て両者は無関係である。ヒューム再評価の嚆矢となるグリーン版ヒューム著作集が出版されたのは、ミルの死後である一八七四年のことであり、「実際、ミルはヒューム問題を把握すらしていなかった」のである¹⁰。またミルの念頭にヒューム問題がなかったことは、『論理学体系』の中にも認められる。ミルは「過去から未来への「闇の中の跳躍」を、我々が自ら観察したところのある過去から、我々が観察したことのない過去への跳躍と全く同じく闇闇の跳躍である」とした上で、この跳躍が経験によって検証されることに問題を認めない（III 577、IV 五一―四頁）。一九世紀中頃までの英国思想界においては、ヒューム問題はそもそもその存在が認められない、少なくともその意義と射程は正確には理解されていなかったのであって、こうした事情はミル帰納法にもあてはまる。ガウアンロックは前掲書において経験哲学の批判者として肯定的にグリーンの名を挙げているが（EPD28、四五頁）、ミルの帰納法とヒューム問題との関係が示唆しているように、ミルの帰納法を、引いては彼の経験主義を、今日的観点から見た古典

の経験論の枠組みに引き付けて解釈することは慎重であらねばならないと考えられる。

三・一 自然の斉一性から因果的背景知識へ

とはいえミルの帰納法と言えはやはり先ず問題となるのは自然の斉一性であり、スコラプスキも自然な出発点として『論理学体系』第三卷第三章「帰納の根拠について」からミル帰納法に関する考察を始めている。

「一度生じたものは、十分類似した状況下では再度生じるだろうし、再度のみならず、同一の状況が生じる度に毎に生じるだろう。この事はあらゆるケースの帰納に含まれている仮定であると、私は主張する。そして我々が自然の現実の過程を調べるならば、この仮定が是認されることがわかる。宇宙は、我々に知られる限り、一つのケースで真である事は、一定の特徴を持った種類の全てのケースにおいて真であるように出来上がっている。唯一の困難はこの特徴を発見することである。」(III 306、III 四五頁)

スコラプスキによればこの斉一性に関する論述には、ミルはそれらを混同しているが、異なる二点、「(a) 一般的斉

一性はあらゆる帰納において仮定されている」と、「(b) 一般的斉一性の存在は帰納を基盤としてのみ知られる」が含まれている(JSM, p172)。そして彼は(a)は偽であるとして退け、(b)のみを受け入れる。確かに斉一性に関してミルは、前半で「仮定である」とすることで、経験的探究にたいするその先行という受け入れ難い主張をしているように見える。しかしミルは上記引用の後、直に斉一性の公理について「最後の帰納の一つ、或いはともかくも厳密な哲学的正確さに達することが最も遠い帰納の一つ」(III 307、III 四六頁)とも述べており、決して斉一性を天下りの性質を持つものとして仮定などしていない。スコラプスキも「帰納のプロセスへの信頼度はその自然史において到達された段階による」(JSM, p172)とミルが主張していること、そしてそれが全体像としては健全であることは認めている(Jid)。だがそれでもなお彼は(a)は認められないと考える。何故ならもし(a)が認められるならば、帰納は一度相当程度の水準まで到達したならば、背景知識から独立に一定の信頼性をもって遂行可能となるから。スコラプスキは『論理学体系』第三卷第三章からの引用によって、帰納において背景知識、就中因果的背景知識が決定的意味を持つことを示す(JSM, p173-175)。

「文明人達は黒い白鳥に出会うことなく三千年に渡って地上で生活を送ってきたのだが、黒い白鳥は存在するのと同様に、「頭が肩の下にある人間」もまた、観察者の反対証言の一致がむしろより不完全であるにもかかわらず、存在しないものだろうか。大多数の人は存在しないと答えるだろう。鳥が色を変えることの方が、人がその主要器官の相対的位置を変えることよりも、より信頼に値する。彼らがそのように言う点で正しいことに疑いはないが、何故正しいかを言うことは、通常なされている以上に帰納の真の理論を深く掘り下げなければ、不可能である。：

何故あるケースでは一つの事例で完全な帰納に対して十分であるのに、他のケースでは無数の事例があり、一つの例外も知られ又は推定されてもいないのに、全称命題を確立するにはなお遠いのか。この問題に答え得る人は、古代の賢人以上に論理学を知る人であり、帰納の問題を解決したことになるであろう。」(III 314、III 五七—五八頁)

確かに我々が帰納を行う際、その範囲、サンプル数、精度等、どれをとっても因果的背景知識抜きには決め難いことは明らかであろう。とはいえ因果的背景知識は重要であ

るとしても、それはどんなものでも良い訳ではない。先の引用においてミルが背景知識として考えていたものは、明らかに科学的な因果的背景知識である¹¹⁾。そしてミル帰納法においては、科学的な因果は更に普遍的因果の法則に基礎づけられるという関係にある。

三・二 普遍的因果の法則から自然主義的解釈へ

帰納法においてミルが提唱した四つの実験的方法(一致法・差異法・共変法・剰余法)は科学的な因果を確立する方法として知られるが、ミルはそれも含め全ての帰納法が普遍的因果の法則によっていることを『論理学体系』第三卷第二十一章「普遍的因果の法則の証明」において以下のように述べている。

「全ての帰納法が成立するための基礎になっている仮定は、あらゆる事象、即ちあらゆる現象の開始には、ある原因又は前件があつて、それから不変的かつ無条件的に継起するということである。一致法においては明白である。：差異法においても同じことを言うことが出来る。：

因果関係の法則の普遍性は、帰納法の全てにおいて仮定されている。」(VII 502-503、IV 四八九—四九〇頁)

ミルは更にこの普遍的因果の法則を再び帰納、それも「粗雑で不確実な帰納方法である単純枚挙による帰納」(III 367, IV 四九八頁)から導き出す。スコラプスキは以上のミルによる帰納法の正当化、「枚挙による帰納から、普遍的因果法則を介して、実験的方法へという正当化の流れ」が「一方向である」¹⁾とを問題視する (JSM^r p191)。スコラプスキが代わって提示する帰納法は、その基礎を「現在の信念状態 (an existing state of belief) に」(JSM^r p189)置く、遡及的(或いは双方向的)な、自己訂正的帰納法である。スコラプスキはそれを『論理学体系』第三卷第七章「観察と実験」に見られる、現存の信念状態に基づき暫定的な性格を持つ「精神的分析 (mental analysis)」を手掛かりとして提示する。精神的分析とは我々が観察や実験をなす際、対象の範囲やそれをどの程度まで分解するかなど、実験的方法の前提をなす分析作業のことである。この精神的分析の作業は適度な点で停止することになるが、常に続行する準備がなされ縛られることのないものである (III 380-381, III 一七〇—一七二頁)。スコラプスキによれば精神分析は、(i)暫定的なものにとどまり、(ii)その受容或いは放棄は、実験的方法による因果諸法則の堅固な体系の確立の成否により、(iii)その適切さへの信頼は、確立

した因果諸法則体が論駁されずにいること及びそれらが信念体系へと組み込まれることによって、遡及的に (retroactively) に強化される (JSM^r p189)。²⁾ ここにはスコラプスキによるミル帰納法の自然主義的解釈の特徴、プラグマティックで全体論的な自然主義が認められる。スコラプスキはミルの帰納法正当化のプログラムが元来一方向的なものであることは承認するが、その基底には自然主義的存在が認められると主張する。スコラプスキはミルの帰納の概念を「帰納的探究は所与の信念体系を修正し、改訂し、拡張する」ものであり、「暫定的仮定は繰り返し改訂され、より十分な形で確認され、かくして仮定の「確実性」の度合いは継続的に増してゆく」ものとして解釈可能とする (JSM^r 191-192)。最後に、以上のミル帰納法の解釈が、ガウアンロックのミル経験主義に対する批判に答え得るものかどうかを検討し、併せてミル経験主義とプラグマティズムの関係に関する論者の見通しを述べたい。

四 終わりに——自然主義から討議へ——

ガウアンロックはミルの『自由論』に見られる可謬性に基づく「真理とは社会的産物である」という当時としては斬新な考えに、プラグマティズムの走りを見た。他方ミル

の認識論の中に古典的経験論の残滓を認め、特にその主観性を批判する。こうしたガウアンロックの批判に対して、ミルの帰納法、取り分けスコラプスキによる自然主義的解釈に見られる認識論・科学哲学ほどの程度答え得るであろうか。先ずスコラプスキもその基本的な健全性を認めた一般的な斉一性の歴史的成立が挙げられよう。ミル帰納法において一般的な斉一性は、三段論法の大前提として天下り的に前提されるものではなく、歴史的・社会的に人類が獲得したものと考えられている。同様のことは普遍的因果の法則についても言えよう。このミル帰納法におけるその基礎の歴史的・社会的獲得という観点は、ガウアンロックによる主観性というミル批判に答え得るもののように思われる。だが一般的な斉一性にしろ、普遍的因果の法則にしろ、ガウアンロックが評価する真理の社会性という条件を十分満たしているには思われない。というのもどちらも歴史的に獲得された結果、ミルはそれらを仮定されるものとしており、従ってそれらは社会に公開はされているがもはや人々の間で討議されるような対象ではなく、前提となるものと考えられるから。スコラプスキによるミル帰納法の自然主義的解釈は、ミル帰納法のこの点を批判し修正したものと考えうる。帰納法の基礎が人類の長期的な経験により成立したものであったとしても、それが一方行的で最早廻

及的な修正或いは強化を受け入れないものであるならば、ミルの認識論は不健全なものであり、退けられねばならぬいだらう。スコラプスキのミル帰納法の解釈において、代わって提示されるものは現存の信念状態であるが、それは個人的で主観的なものであるにもかかわらず、ガウアンロックの批判に対してより有効に答えうるように思われる。何故なら現存の信念状態に基づくと考えられる科学的な因果的背景知識は、単なる個人の主観的なものに留まることはありえないから。それは主観的なものでありながら、経験と因果法則に結び付く点で客観的でありうる上に、自己の外部からもたらされるものによって訂正或いは強化され得るものであるから。またそのような現存の信念状態は、それを足掛かりとして他者も含まれるところの外部へと主体的に働きかけることも期待できると考えられる。何故ならば我々の信念は、必ずしも受け身の形でのみ形成されるとは考えがたく、その形成において主体的に他者を含む外部へと働きかける双方向的なものと考えるから。かくして現存の信念状態をその基礎とするミル帰納法、ひいてはミルの認識論・科学哲学は、真理の社会的形成というプラグマティックな真理観に接近するよう思われる。だがデューイを高く評価するガウアンロックによるミルの認識論・科学哲学の中にある古典的経験主義批判に

答えるためには、外部、とくに他者へと開かれていることを示唆するだけでは、いまだ十分な回答に至っていないように思われる。ミルの認識論・科学哲学が外部、他者へと開かれている点に加え、その公開性の実態がいかなるものが明確にされて初めて、ガウアンロックの批判に十全に答え得たことになるであろう。そしてそのヒントとなるような視点は、『自由論』の先にガウアンロックの引用した(但し彼は後段を省略した)箇所に見出されるのである。

「人間は経験と議論によって、自分の誤りを改めることができる。ただし、経験だけではダメである。経験をどう解釈すべきかを知るために、議論が必要だ。間違った意見や行動は、事実と議論によってしだいに改められていく。しかし、人間を心底から納得させるには、事実と議論をはっきり示してあげなければならぬ。事実を見ただけで意味をわかることはめつたにない。その意味を理解するには何らかの解説が必要なのである。」(XIII 231、五三頁)

【注】

(一) 『トロント大学版ミル全集』 *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. J. M. Robson (Toronto: University of Toronto

Press, London, 1963-91), 33 vols. の参照・引用は、巻数(ローマ数字)とページ数(アラビア数字)を併記する。なお訳に關しては『論理学体系』は大関将一・小林篤郎訳(春秋社、一九四九―五九)に、『自由論』は斉藤悦則訳(光文社、二〇一三)に従ったが、引用に際しては訳を変更させて頂いた箇所もある。巻数(『論理学大系』のみ)をローマ数字で頁数を漢数字で表し、『トロント大学版ミル全集』の後に表記する。

(2) 数学を巡って、経験から独立と考えるフレーゲと非独立とするミルとは鋭く対立する。フレーゲによるミル批判に關しては、Anthony Kenny, *Frege*, Penguin Books, 1995. アンソニー・ケニー『フレーゲの哲学』(野本和幸・大辻正晴・三平正明・渡辺大地訳、法政大学出版局、二〇〇一)を参照。

(3) John Skorupski, *John Stuart Mill*, Routledge, 1989. 以下引用・参照に際してはJSMと略記する。スコラプスキはクワインの自然主義とミルとの間に「精神における類似」性を認め、「ミルの哲学思想の核心は徹底的な自然主義である。人間は完全に科学によって研究される自然の因果秩序の一部である。人間はより広範な因果秩序内の因果システムである」と主張する。(JSM, p4-5)。

(4) 仲正は有名なジェイムズの『プラグマティズム』のミルへの献辞に触れた後、『自由論』の第二章にプラグマティズムに通じる思想が見いだされることを指摘している(仲正昌樹『プラグマティズム入門講義』(作品社、二〇一五)、五一―五二頁)。勢力はより思想内容に踏み込み、やはりミルとジェイムズの関係に言及して、ミルの中

間公理、中間公理としての人類の思弁的能力、他者危害原則の三点にジェイムズ思想に通底するものを見出している(勢力尚雅・古田徹也『経験論から言語哲学へ』(放送大学教育振興会、二〇一六、一四五―一四七頁))。

- (5) Hilary Putnam, *Ethics without ontology*, Harvard University Press, 2004. p7. ヒラリー・パトナム『存在論抜き倫理』(関口浩喜・渡辺大地・岩沢宏和・入江さつき訳、法政大学出版局、二〇〇七)、八頁。

- (6) James Gouinlock, *Excellence in public discourse*—John Stuart Mill, John Dewey, and Social Intelligence, Teachers College, Columbia University, New York and London, 1986. 以下引用・参照に関してはEPDと略記し、ページ数をアラビア数字で表記する。なお訳に関してはJ・ガウアンロック『公開討議と社会的知性』(小泉仰監訳、大久保正健・土屋貴志・森庸訳、御茶の水書房、一九九四)に従い、頁数を漢数字で表記する。近年の公的知識及び公開討議についてのミルとデュニーの関係に関する論考としては、Philip Kitcher, *Preludes to Pragmatism*, Oxford University Press, 2012. ch15, ch16. があるが、認識論に関する言及はガウアンロックと比較した場合相対的に少なく、他方今日的課題への適用可能性への考察が手厚い。

- (7) 高島和哉は『ベンサムと言語論』(慶応義塾大学出版会、二〇一七)の「補論 デュニーとベンサム」においてベンサムの認識観および科学観とデュニーのそれとの類似性を大変説得的に論じているが、残念ながらミルへの言及はデュニーとミルとがともに持つ民主主義評価に関するもののみであり、両者の認識論・科学哲学における関係性につ

いては言及されていない(高島和哉、同書、四三―四五二頁)。またベンサムの言語論および論理学が持つプラグマティズムの含意を論じた箇所において、高島は「ベンサムの方法論上の革新は主として彼の言語論上の革新に依拠するものであったし、言語論を基礎に据えた自らの科学方法論をベンサムは「論理学」という名の下に(決して十全な方たちではないにせよ)展開したにもかかわらず、ミルはベンサムの言語論や論理学の斬新さや重要性をほとんど認識していなかった」点を指摘している(高島和哉、同書、四九頁)。本論は先述したようにガウアンロックの批判に答えるに留まるものであり、ベンサム、ミル、デュニーの科学方法論全体の関係に関しては本論の範囲を超えている。高島の指摘への回答は後の課題としたい。

- (8) 「世論の歴史と普通の人間の営みを眺めてみよう。そのどちらもが現在もそうだが、大きく道を逸れたりしないのは、何のおかげなのであろうか。

それはけっして人間の知性に備わる力のおかげではない。なぜなら、自明といえない問題を前にすると、是非を判断する能力がある者は百人中一人ぐらいで、残りの九十九人はまったく判断の能力がないからである。しかも、その一人ですら、その能力は相対的なものにはすぎない。昔の時代の偉人とされるひとびとの多くが、現在では誤りだと知られている意見を持ち、いまでは誰も正しいと認めないようなことを、たびたびおこない、あるいはたびたび承認したのである。

…人間は自分の誤りを自分で改めることができる。知的で道徳的な存在である人間の、すべての美点の源泉はそこ

にある。

人間は経験と議論によつて、自分の誤りを改めることができる。…

人間が判断力を備えていることの真価は、判断を間違えたとき改めることができるという一点にあるのだから、その判断が信頼できるのは、間違いを改める手段を常に自ら保持している場合のみである。

…

われわれがもつとも確かだと思つていることでさえも、絶対的な根拠があるわけではない。だから、われわれは逆に、それが間違いであることを証明せよと、つねに全世界に呼びかけるしかない。…

討論の場がつねに開かれていれば、よりすぐれた真理がそこに存在するとき、そして、われわれの知性にそれを受け入れる余裕があるとき、それはきつと発見されるだろう。それまでのあいだでも、われわれは今日の段階で可能ながぎり真理への接近を果たせたと自負することができよう。

こうしたことこそ、誤りを犯す存在である人間にとつて到達可能な確実性の頂点であり、かつ、そこに到達する唯一の道なのである。」(XIII 231-232^c 五二一—五六頁)

(9) ミルの経験主義が経験主義の伝統の中でどのように位置づけられるかは、それ自体難問である。ファン・フラッセンは経験主義という名称について論じた論考において、ミルの帰納について、それがミルの認識論において中心的役割を果たしていること、及びそれが危険なまでに合理主義に接近していることを主張し、ミルを「いわゆる」経験

主義者」と区別]する (Bas C. van Fraassen, *The empirical stance*, Yale University Press, 2002, p207-9)。ミルを古典的经验論の継承者として捉える大久保は、『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』に依拠し、ミルの「感覺主義の形而上学」を独創的なものとして称揚している。「対象の実在性を保証しているのは、感覺されるということである。(この点でミルはバークリ主義者である。)しかし、感覺されるという可能性がいろいろな形でこのこつている間は、対象は安定的に実在している。この実在性は、心の中の不安定な観念によつて確かになったり不確かになったりするのではない。その実在性は感覺され続けている限り「恒常的」である」(大久保正健『ジョン・スチュアート・ミルと直観主義形而上学』(有江大介編著『ヴィクトリア時代の思潮とJ・S・ミル』、三和書籍、二〇一三、所収)参照)。このような形而上学が果たしてガウアンロツクのミル経験論批判に対して有効であるか否か、及び『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』と『論理学体系』の関係をいかに捉えるかは本論の範囲を超えており、後の課題とする。

(10) Geoffrey Scarre, *Logic and Reality in the philosophy of John Stuart Mill*, Klumer Academic Publishers, 1989, p81-4.

(11) ミルは再度黒い白鳥と頭を肩の下にもつている人間の例を取り上げる際、それははっきりと科学的帰納の例としている (III 319^c, III 六六—六七頁)。